

尾形了齋覚え書

芥川龍之介

青空文庫

今般、当村内にて、切支丹きりしたん宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目じんもくを惑まとはし候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一ちくいち公儀へ申上ぐ可き旨むね、御沙汰相成り候段屹度承知仕り候。

陳者のぶれば、今年三月七日、当村百姓与作後家篠しのと申す者、私宅わたくしたくへ参り、同人娘里さと（当年九歳）大病に付き、検脈致し呉れ候様、懇々頼入り候。

右篠と申候は、百姓惣兵衛の三女に有之これあり、十年以前与作方へ縁付き、里を儲まうけ候も、程なく夫に先立たれ、爾後再縁も仕らず、機織はたおり乃至賃仕事など致し候うて、その日を糊こ口こうし居る者に御座候。なれども、如何なる心得違ひにてか、与作病死みぎりの砌もつぱより、専ら切支丹宗門に帰依きえ致し、隣村の伴天連ばてれんろどりと申す者方へ、繁々出入でいり致し候間、当村内にて、も、右伴天連の妾てかけと相成候由、取沙汰致す者など有之、兎角の批評絶え申さず、依つて、父惣兵衛始め姉弟共一同、種々意見仕り候へども、泥鳥須でうす如来より難有ありがたきもの無しなど申し候うて、一向に合点仕らず、朝夕、唯、娘里と共にくるすと称とへ候小き礫柱はりきがた形の守り本尊を礼拝らいはい致し、夫与作の墓参さへ怠り居る始末に付き、唯今にては、親類縁者とも義絶致し居り、追つては、村方にても、村払ひに行ふ可き旨、寄り寄り評議致し居る由に御座候。

右様の者に候へば、重々頼み入り候へども、私検脈の儀は、叶ふまじき由申し聞け候所、
一度は泣く泣く帰宅致し候へども、翌八日、再私宅へ参り、「一生の恩に着申す可く候
へば、何卒御検脈下され度」など申し候うて、如何様断り候も、聞き入れ申さず、はて
は、私宅玄関に泣き伏し、「御医者様の御勤は、人の病を癒す事と存じ候。然るに、私娘
大病の儀、御聞き棄てに遊ばさるる条、何とも心得難く候。」など、怨じ候へば、私申し
候は、「貴殿の申し条、万々道理には候へども、私検脈致さざる儀も、全くその理無し
とは申し難く候。何故と申し候はば、貴殿平生の行状誠に面白からず、別して、私始め村
方の者の神仏を拝み候を、悪魔外道に憑かれたる所行なりなど、屢誹謗致され候由、確と
承り居り候。然るに、その正道潔白なる貴殿が、私共天魔に魅入られ候者に、唯今、
娘御の大病を癒し呉れよと申され候は、何故に御座候や。右様の儀は、日頃御信仰の泥
烏須如来に御頼みあつて然る可く、もし、たつて私、検脈を所望致され候上は、切支丹宗
門御帰依の儀、以後堅く御無用たる可く候。此段御承引無之に於ては、仮令、医は仁
術なりと申し候へども、神仏の冥罰も恐しく候へば、検脈の儀平に御断り申候。」斯
様、説得致し候へば、篠も流石に、推してとも申し難く、其儘凄々帰宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通も絶え候所、卯時ばかりに、篠、

傘をも差さず、濡鼠ぬれねずみの如くなりて、私宅へ参り、又々検脈致し呉れ候様、頼み入り候間、私申し候は、「長袖ながら、二言にことは御座無く候。然れば、娘御の命か、泥烏須如来か、何れか一つ御棄てなさるる分別肝要と存じ候。」斯様かやう申し聞け候へば、篠、此度は狂氣の如く相成り、私前に再三額ぬかつき又は手を合せて拝みなど致し候うて、「仰せ千万せんばんごもつと御尤もに候。なれども、切支丹宗門の教にて、一度ころび候上は、私魂たまむろ軀とも、生々世々亡び申す可く候。何卒なにとぞ、私心根を不憫と思召おぼしめされ、此儀のみは、御容赦下され度候。」など搔くき口説くどき咽むせび入り候。邪宗門の宗徒とは申しながら、親心に二無にき体相見え、多少とも哀れには存じ候へども、私情を以て、公道を廃へす可べらざるの道理に候へば、如何様やう申し候うても、ころび候上ならでは、検脈叶かなひ難き旨、申し張り候所、篠、何とも申し様無き顔を致し、少時しばらく私顔を見つめ居り候が、突然涙をはらはらと落し、私足あしもと下に手をつき候うて、何やら蚊の様な声にて申し候へども、折からの大雨の音にて、確しかと聞き取れ申さず、再三聞き直し候上、漸やうやく、然らば詮無く候へば、ころび候可おもむき趣、判然致し候。なれどもころび候実証しつねん無之候へば、右証明あかしを立つ可き旨、申し聞け候所、篠、無言の儘、懷中より、彼かのくるすを取り出し、玄関式台上へ差し置き候うて、静に三度まで踏み候。其節は格別取乱したる気色けしきも無之、涙も既に乾きし如く思はれ候へども、足下のくるすを眺

め候眼の中、何となく熱病人の様に、私方下男など、皆々気味悪しく思ひし由に御座候。
扱さて、私申し条も相立ち候へば、即刻下男に薬籠やくろうを担はせ、大雨の中を、篠同道しのにて、
同人家へ参り候所、至極手狭なる部屋に、里さと独り、南を枕にして打臥し居り候。尤も身しんね
熱烈つしく候へば、殆ほとん正気無これな之き体ていに相見え、いたいけなる手にて繰返し、繰返し、空くうに
十字を描き候うては、頻しきりにはるれやと申す語を、現うつの如く口走り、其都度嬉つどしげに、微笑ほほえ
み居り候。右、はるれやと申し候は、切支丹宗門の念仏にて、宗門仏に讃さん頌しやうを捧ぐる
儀に御座候由、篠、其節枕辺まくらべにて、泣く泣く申し聞かし候。依つて、早速検脈致し候へ
ば、傷しやう寒かんの病に紛れ無く、且は手遅れの儀も有之、今日中にも、存命覚束なかる可き
やに見立て候間、詮せん方かた無く其旨、篠へ申し聞け候所、同人又々狂氣の如く相成り、「私
ころび候仔細は、娘の命助け度き一念よりに御座候。然るを落命致させては、其甲斐、万
が一にも無これな之かる可く候。何卒泥烏須如来に背き奉り候私心苦しさを御汲み分け下され、
娘一命、如何にもして、御取り留め下され度候。」と申し、私のみならず、私下男足下
も、手をつき候うて、頻しきりに頼み入り候へども、人力にては如何とも致し難き儀に候へば、
心得違ひ致さざる様、呉れ呉れも、申し諭さとし、煎薬三貼さんでふ差し置き候上、折からの雨止み
を幸さいはひ、立ち帰らんと致し候所、篠、私袂たもとにすがりつき候うて離れ申さず、何やら申さんと

する気色けしきにて、唇くちびるを動かし候へども、一言も申し果てざる中に、見る見る面色たちまち変り、忽たちまち其場に悶絶もんぜつ致し候。然れば、私大おほいに仰天致し、早速下男共々、介抱仕り候所、漸やうやく、正氣づき候へども、最早立上り候氣力も無之、「所詮は、私心浅く候儘、娘一命、泥烏須如来、二つながら失ひしに極まり候。」とて、さめざめと泣き沈み、種々申し慰め候へども、一向耳に掛くる体も御座無く、且は娘容態も詮無く相見え候間、止むを得ずふたたび再下男召し伴れ、そうそう々 帰宅仕り候。

然るに、其日 未時ひつじどき 下り、名主塚越弥左衛門殿母儀檢脈に参り候所、篠娘死去致し候由、並に篠、悲嘆のあまり、遂に発狂致し候由、弥左衛門殿より承り候。右に依れば、里落命致し候は、私檢脈後一時ひとときの間と相見え、巳みの上刻には、篠既に乱心の体にて、娘死骸を搔き抱き、声高こわだかに何やら、蛮音ばんいんの経文誦どくじゆ誦致し居りし由に御座候。猶なほ、此儀は、弥左衛門殿直に見受けられ候趣にて、村方嘉右衛門殿、藤吾殿、治兵衛殿等も、其場に居合されし由に候へば、千万せんばんじつじ実事たるに紛れ無かる可く候。

追つて、翌十日は、朝来小雨有之候へども辰たつの下刻より春雷を催し、稍やや、晴れ間相きざし候折から——村郷士梁瀬金十郎殿より、迎への馬差し遣はされ、檢脈致し呉れ候様、申し越され候間、早速馬上にて、私宅を立ち出で候所、篠宅の前へ来かかり候へば、村方の

人々大勢たらず佇み居り、伴天連ばてれんよ、切支丹きりしたんよなど、罵り交し候うて、馬を進め候事さへ叶ひ申さず、依つて、私馬上より、家内の容子差し覗き候所、篠宅の戸を開け放ち候中に、紅毛人こうもうじん一名、日本人三名、各々法衣ころもめきし黒衣を着し候者共、手に手にかの彼くるす、乃至は香炉様の物を差しかざし候うて、同音に、はるれや、はるれやと唱へ居り候。加之しかのみならず、右紅毛人の足下あしもとには、篠、髪を乱し候儘、娘里さにとを搔き抱き候うて、失神致し候如く、蹲り居り候。別して、私眼を驚かし候は、里、両手にてひしと、篠頸うなじを抱き居り、母の名とはるれやと、代る代る、あどけ無き声にて、唱へ居りし事に御座候。尤も、遠眼の事とて、確しかとは弁わきまへ難く候へども、里血色至極麗うるはしき様に相見え、折々母の頸より手を離し候うて、香炉様の物より立ち昇り候煙を捉へんとする真似など致し居り候。然れば、私馬より下り、里蘇生致し候次第に付き、村方の人々に委細相尋ね候へば、右紅毛の伴天連ばてれんろどりげ儀、今朝こんてう、伊留満いるまん共相従へ、隣村より篠宅へ参り、同人懺悔こひさん聞き届け候上、一同宗門仏に加持致し、或は異香を焚たき薫くゆらし、或は神水を振りそそぎなど致し候所、篠の乱心おのづかは自ら静まり、里も程無く蘇生致し候由、皆々恐しげに申し聞かせ候。古来一旦落命致し候上、蘇生仕り候類たぐひ、元より少からずとは申し候へども、多くは、酒毒あたに中り、乃至は瘴氣しやうきに触れ候者のみに有これあり之、里の如く、傷寒の病にて死去致し候者の、還魂くわんこん仕り候例ためしは、未

まだかつて
 嘗 承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此一事にても分^{ぶんみやう}明致す可く、別して伴天連当村へ参り候節、春雷頻に震ひ候も、天の彼を憎ませ給ふ所かと推察仕り候。

猶^{なほ}、篠^{しの}及娘^{さと}里^{さと}当日^{ばてれん}伴天連^{ばてれん}ろどりげ同道にて、隣村へ引移り候次第、並に慈元寺^{じげんじ}住職日寛殿計らひにて同人宅焼き棄て候次第は、既に名主塚越弥左衛門殿より、言^{ごんじやう}上仕り候へば、私見聞致し候仔細は、荒々^{あらあら}右にて相^{さい}尽^おき申す可く候。但^{ただし}、万^{まん}一^{いつ}記し洩れも有之候節は、後日再^{さい}応^{おう}書面^{さる}を以て言上仕る可く、先^{まづ}は私覺え書斯くの如くに御座候。以上
 申^{さる}年三月二十六日

伊予国宇和郡^{ごほり}——村

医師 尾形了斎

(大正五年十二月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系」芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utyama

校正：野口英司

1998年10月5日公開

2004年2月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

尾形了齋覚え書

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>